『禅秘要法経』(T.613)と『治禅病秘要法』(T.620)に見られる禅病について

—初期禅修の伝統における破戒に対する観想法を論ず—[1]

林 佩瑩*著・黒崎 恵輔**訳

摘要

本稿のテーマは、初期の中国における禅定修行の伝統における禅病であるが、紙幅の制約のため、着眼点を戒律に違反した際の禅病関係に絞る。禅病とは、修禅者が修行するときに起こりうる身・心の病であり、これを説く代表的文献が、漢伝仏教の中でも初期の禅定経典『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』であり、おおよそ5世紀頃の中国に登場する。両文献中では、禅病に対する対治のなかで主要なものを観想に求めている。これらを鑑みて、本稿では、両経典中にみえる戒律に違反した際の観想による対治に焦点を合わせて論ずる。始めに破戒を行った場合の観想法について説明し、続けて二つの経典中に言及される菩薩戒、すなわち大乗思想的色彩が、いかにして「禅経」系統に入り込んでいったのかについて論究する。

一、禅経

紀元4世紀から5世紀にかけて、多くの習禅のための経典が中国へと伝わった。これら「禅経」の間には記述の重複や相互に引用されるといった関連性があり、伝授された内容の多くは「禅数」であり、しかもその具体

*台湾・輔仁大学宗教学系助理教授
**早稲田大学大学院文学研究科修了

的方法であったから、後の中国禅宗の文献とは相貌を異にするものであった。この時期にインド・中央アジア・中国に現れた主要な経典を以下に掲げる。

1．Yogalehrbuch（梵文本）[2]
2．『達摩多羅禅経』（Yogacarabhumi of Buddhasena）（T.613）、仏陀跋陀羅訳。
3．『坐禅三昧経』（Dhyana-niṣṭhita-samadhi-dharma-paryaya-sutra）（T.614）、鳩摩羅什訳。
4．『禅法要解』（T.616）、鳩摩羅什訳。
5．『思維略法要』（T.617）、鳩摩羅什訳。
6．『五門禅経要用法』（T.619）、曇摩蜜多訳。
7．『禅秘要法経』（T.613）、鳩摩羅什訳。
8．『治禅病秘要法』（T.620）、沮渠京聲訳。

『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』は漢伝仏教のなかでも初期の禅定経典であり、おおよそ5世紀頃に中国に現れた。『禅秘要法経』は、伝統的に鳩摩羅什（344～413）の翻訳とされる。『治禅病秘要法』二巻は、『治禅病秘要』『治禅病秘要法経』『治禅病秘要経』『禅要秘密治病経』などとも称され、455年、劉宋の考建年間に伝わり、竹囲寺の北涼の沮渠京聲（？～464）によって翻訳された。二つのテキストが、元々の梵文あるいは中央アジアの言語からどのようにして漢語に翻訳されたのかについてははっきり分からず、考察されねばならないが、学会でもいまだ合意が形成されておらず、ただ高い関心のもとに疑問が持たれている状況である。今日では複数の学者たちが、これらを中央アジアの禅定文献であると説いているが、一方で中国撰述であるとの主張もある。

『禅秘要法経』や『治禅病秘要法』と同時代に出現した中国の禅定経典に、『五門禅経要用法』などがある。上述の経典群については、山部能宜氏の

博士論文中に詳細な研究がなされている。これらの禅経の全体を通しての山部氏の主要な観点は、鳩摩羅什の訳には明らかな大乗仏教的色彩があるが、曇摩密多と沮渠京声の訳にはやや神秘主義的色彩が多く、排列の仕方も精緻さに欠けるばかりか、中国的思想も認められることから、中国文化圏において―広義の中国文化圏には中央アジア地域も含まれている―作られた可能性が高いとするものである[3]。山部能宜教授は、以前、『禅秘要法経』、『治禅病秘要法』、『五門禅経要用法』、『観仏三昧海経』（T.643）に対して系統立った比較を行い、これらの経典中の観想と灌頂の関連に重点を置き、禅定修行と観想・灌頂の関連をもっと深く考えるべきことを示唆しており、密教と禅定修行の関係についても手がかりを与えてくれている[4]。氏の見仏懺悔に対する考察は非常に緻密であり、早くから、これら初期の禅経が密教的な色彩を帯びていることに注目し、それが同時代の中央アジアにおける仏教の特色と関係するものであろうとしている。また、注目に価するのは、観仏懺悔の実践方法が禅定修行以外の典籍にも現われ、菩薩戒を授ける経典とも大いに関連を持つことを指摘したという点である[5]。

中央アジアにおける禅定修行の伝統と中国仏教の関係について、山部能宜氏は、その後さらに、吐魯蕃（Turfan）の吐峪溝（Toyok Cave）第42窟禅観壁画の研究を発表され、『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』に見られる禅定修行が中央アジア地域に盛行していた修行にその基盤を持つ可能性を主張した[6]。第42窟壁画の内容と禅観経典テキストの描写とにはある程度において一致することが認められ、また少なからぬ場面でテキストの内容と対応している。ただし全体の構成について言えば、壁画は現在見られるあらゆるテキストとどれも一致するものではなく、したがって、必ずしも壁画の文はひとつの経典を藍本とするものと認められるものではない。それでも、それが当地における禅観の伝統に根ざし、壁画が依拠している経典が吐魯蕃の地で生まれたものである可能性は大いにあるとした。中央アジアの禅定修行が禅経にまで浸透していき、やがて中国の禅観へと影響を及ぼしたことを、間接的に証明したのである。

このテーマは、他の学者に注目されるところとなった。例えば森美智代は、クムトラ第75窟の壁画と題記について考察する際にその壁画がYogalehrbuchやその他の禅経の影響を蒙っていると説明している[7]。また、王芳も、亀茲の多くの石窟壁画について考察する際に、禅観と浄土の観想が兼修されたことを見出し、仏を観想することを中心にしつつ、多くのところで東晋の仏陀跋陀羅訳の『観仏三昧海経』（T.643）に説かれる念仏の教えとも照応していると指摘している[8]。禅経と多くの一致を認めることのできるもの、例えばキジル104、196、224窟の壁画には白骨観の絵画があるが、彼女はここに『治禅病秘要法』巻下の記述を挙げて対応関係を示している。そこには、日天・月天・金翅鳥・龍・仏陀を観想することで恐怖を除くことが述べられている。

> 治之法者、先想一日與日天子乗四寶宮殿作百千伎樂、在黒山上 照曜黒山令漸漸明。想一日成已、復想二日。想二日已、復當自觀己身白骨三百三十六節白如雪山、日照雪山。復想頂上有月天子四寶宮殿、百千眷屬捉於月珠置其頭上。此想成已、想第三山上復有一日、如上無異。見此日已、復想頂骨白雪山上如上、復有一月……此想成已、復想一金翅鳥王頭戴摩尼珠、搏撮四蛇及 與六龍、蛇驚龍走。（T.620：339 b14-c1）

地域性に富む壁画を研究することは、当地での修行の実際を理解するのに役立つものであるが、特に亀茲のように禅定が流行した地域については、十分な研究が必要である。そこで、王芳氏も山部氏の見方に同意し、この壁画が『治禅病秘要法』と中央アジアにおける禅定修行との関係を示す証拠となり、また、その関係を強めるものであると考えている。同様に、少なからぬ学者が、浄土を観想する「観経」と「禅経」が密接に関わることに関心を寄せるとともに、経典がインドおよび中央アジアに来源を持つことを強調した。例えば、末木文美士氏は『観無量寿経』について、その作者が有していたインドの情報は７世紀以前にはまだ中国に伝わっていない

ことから、必ずやインド文化に直接由来するもので、中国撰述ではないであろうとする[9]。

最近、Eric Greene氏が提出した博士論文は、上述してきた「禅経」に対し精緻な整理を進めたものである[10]。伝世本と奈良写本とを比較対照することで、『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』の成立に関する文献的関係を整理し、両経はその来源が重なっている可能性があると述べる[11]。同時に、氏は『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』にはインド文化の要素が有るとはいえ、むしろ中国撰述の可能性があるということを強調している。今のところ、『禅秘要法経』や『治禅病秘要法』の成立と翻訳者が誰かという問題は、研究すべき余地を残している。上に掲げた研究によると、『禅秘要法経』や『治禅病秘要経』は、インドの影響が見られるようでもあり、インドと中央アジアと中国文化が交わる中で生まれた経典であるようにも考えられるが、いずれにせよ、『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』は、中央アジアの禅定修行の伝統と密接な関係を持つものであることは否定できない。

二、禅病

禅病とは何か。簡略に言えば、習禅者が禅の真理を体得しないままに起こり得る各種の疾病であり、身・心の二種に分けられる。禅病の意味に関しては、宇井伯寿『仏教辞典』中に、「禅定の病魔の謂にて、一切の妄念をいふ」とある[12]。つとに禅病を主題として論じたものには、日本の浅野斧山『禅病論』がある[13]。その後、船岡誠「禅病について」という論文が著わされた[14]。ただ、上述の研究では、禅経の文献そのものに対する深い検討はなされてこなかった。漢訳仏典の中で禅病に言及する大乗経典には、『禅秘要法経』『治禅病秘要法』『首楞厳三昧経』『円覚経』などがある。

有名な十巻本の『首楞厳三昧経』のうち第九巻と第十巻には、五蘊がそれぞれ十種魔境を形成するという、すなわち五十種魔境の分析がなされ、

また如来蔵清浄心に対する再検討がなされる[15]。また『円覚経』には次のように述べられている。

> 普覺菩薩、在大衆中、即從座起、頂禮佛足、右遶三匝、長跪叉手、而白佛言、「大悲世尊、快説禪病、令諸大衆、得未曾有、心意蕩然、獲大安隱」。（T.842：920 a25-28）

ここは普覚菩薩が世尊に向かって説法を請い、あらゆる習禅者のために禅病の対治の方法を説明する場面である。経中の所説は、大乗の空観を主として、四大皆空・色不異空の空観をおこなうもので、初期の禅経にある煩瑣性とは似つかない。

同様に、『大乗起信論』にも禅病に言及する箇所が見受けられるが、巻末の「修行信心分」が主で、そこでは「善根力のない衆生は、諸魔・外道・鬼神に惑わされ、坐禅中にその姿を見て恐ろしい思いをしたり、端正な男女の姿を見たりする。そうした時は唯心を念ずれば、その姿は滅し、惑わすこともなくなる」（「或有衆生、無善根力、則爲諸魔・外道・鬼神之惑亂、或於坐中現形恐怖、或現端正男女等相。當念唯心、境界則滅、終不爲惱。」T.1666.32；582b4-7）と述べている。このような、あるいはその他の悪魔に対する対治方法は、「修行者は常に智慧で観察すべきであり、この心を疑いの網の中に堕としてはいけない。常に正しい思念を持つよう励み、執着してはならない」（「行者常應智慧觀察、勿令此心墮於邪網、常勤正念、不取不惜」T.1666.32；582b21-23）というものである。この論は禅定修行のための典籍ではないし、また禅病について詳細に論じているわけでもないが、その中心は、心そのものが真実であり、妄念が虚妄であることを体得するところにあるのである。

中国禅宗文献のうち初期禅宗の伝統に属する『信心銘』にも、「心病」が挙げられて「身病」と対比されるが（「違順相爭、是爲心病」（T.2010：376 b22-23）、その論理はやや『円覚経』に近いもので、煩瑣な分析も無く、

抽象的な空観によって身病の根源はすなわち無明であると解釈している。これらに似たものとして北斉の僧稠（480-560）禪師の『稠禅師薬方療有漏』と、神秀（606?-706）の作とされるが真偽未詳の『秀禅師勧人薬病偈』とがあり、いずれも、空を観じて欲を離れることで心病を対治することを説いている[16]。また、宋代の長蘆宗賾（960-1279）の『坐禅儀』には、「自分では、坐禅は安楽の教えであると思うが、人がややもすると病気になってしまうのは、心の用い方が正しくないからであろう」（「竊謂坐禅乃安樂法門、而人多致疾者、蓋不善用心故也」）[17]とあり、禅宗の典籍や『円覚経』『起信論』等は、いずれも「心病」を障碍・悪魔の根源と見做すが、禅病を細かく分類することには関心を示していない。

しかし、『円覚経』や『起信論』の簡略さに較べて、『禅秘要法経』や『治禅病秘要法』は比較的詳しく禅病の区分について述べている。『禅秘要法経』の上・中・下三巻には、三十種類以上の観法が述べられているが、その多くは心病を対治するための方法であるとされ、不浄観・四大観・仏観・慈心観などが説かれている。『禅秘要法経』は、巻上において、主に四大観、白骨観、不浄観を説明し、巻中では、滅罪懺悔の方法や観仏三昧法・四大相応法・不浄観灌頂法門・和暖法などが説かれ、巻下は、慈心観や四大清浄観が中心となっている。

一方、『治禅病秘要法』の上・下二巻では、心病と身病の双方が論じられている。禅病は、乱倒心・四大内風・火大・地大・水大・風大・噎・貪婬・利養瘡・犯戒・楽音楽・好歌唄偈讃・鬼魅所著などの身心の病に分類されている。経中には、それぞれに対応する治療方法が示されているが、いずれも観想法であって、密教的色彩が強く窺われる。いま、両経の標題を示すと下の表のようになる。

T.613『禅秘要法経』	T.620『治禅病秘要法』
1．不淨想（最初境界）	1．治阿練若亂心病七十二種法
2．白骨觀（最初境界）	2．治噎法
3．慚愧自責觀	3．治行者貪婬患法
4．膖脹膿血（不浄観）+易想觀	4．治利養瘡法

5．觀薄皮不淨（不浄観） 6．觀厚皮蟲聚（不浄観） 7．極赤淤泥濁水洗皮雜想（不浄観） 8．新死想（不浄観） 9．具身想 10. 節節解觀 11. 白骨流光觀 12. 四大觀/九十八使境界（不浄觀） 13. 結使根本觀 14. 易想觀/觀外四大/漸解學觀空 15. 四大觀 （巻中始） 16. 四大觀 17. 身念處 18. 觀身不淨雜穢想/破我法觀無我空/一門觀 19. 觀像三昧（灌頂の法）/念佛定/除罪業/救破戒 20. 不淨觀灌頂法門/數息觀 21. 和暖法 22. 觀頂法 23. 觀助頂法 24. 火大觀 25. 火大無我觀+｛文中に標題のない段落が挿入されている：｝灌頂法/四大相應觀 （巻下） 26. 正觀/須陀洹道 27. 真無我觀/滅水大想/向斯陀含 28.（文欠） 29. 水大觀/斯陀含 30. 風大觀/阿那含 31. ｛文中には標題はない：｝慈心+四大清淨觀法 32. ｛文中には標題はない：｝無常觀	5．治犯戒法 （巻下始） 6．治樂音樂法 7．治好歌唄偈讃法 8．治水大猛盛因是得下 9．治因火大頭痛眼痛耳聾法 10. 治入地三昧見不祥事驚怖失心法 11. 治風大法 12. 初學坐者鬼魅所著種種不安不能得定治之法

上述の『禅秘要法経』や『治禅病秘要法』などの禅経が４～５世紀の間に漸次に訳出されて後、中国の僧侶も禅病の症状に注目しはじめた。そのなかでも天台智顗（538～597）の影響には大きなものがある。智者大師は禅定の修行法の研鑽に心血を注ぎ、『禅秘要法経』や『治禅病秘要法』を参照し、『小止観』と『摩訶止観』において禅病の症状とその解消の方法

を解き明かしている。智顗の『釈禅波羅蜜次第法門』巻四には次のように述べられている。

> 夫坐禪之法、若能善用心者、則四百四病自然差矣。若用心失所、則動四百四病。（T.1916：505 b15-17）

智顗は禅病の治療を明らかにするのに、まず病を起こす「相」をはっきりさせてから、治病の方法へと論を進める。その「相」には、内外に分けられる二つの病相、すなわち心病・身病の相違がある。その病にかかる因縁にも違いがあり、四大五臓や、あるいは鬼神の仕業、あるいは業報の所為などの可能性があって、これらに対応する対治の方法というのもまた異なる。智顗の『小止観』の禅病の要点は後に宗密の『円覚経修証儀』（X.74. no.1475）に引かれている。智顗の思惟は、『首楞厳経』や『円覚経』よりも複雑かつ仔細であるが、明らかに『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』の啓発を受けたと思われる箇所が多く認められ、これらの初期の禅経が中国に及ぼした確かな影響を示している。

三、観想 / 懺悔 / 戒

禅病を治療する「薬物」こそ観想であり、対処する症状に応じてその観想は異なる。その違いを挙例すれば、白骨観・四大観・慚愧自責観・不浄観などがある。上述の禅経による対治法には多くの類似性が認められ、同じように山部氏も『思惟略要法』と『五門禅経』との比較を進めた後に、多くの類似箇所と重複する章節とを明らかにした[18]。

その中で、『思惟略要法』と『五門禅経』のどちらにも見られるのが、四無量観法・不浄観法・白骨観法・観仏三昧観法・生身観法・法身観法・十方諸仏観法であり、『思惟略要法』だけに出てくるのが、観無量寿仏法・諸法実相観法・法華三昧観法、『五門禅経』だけに出てくるのが、念仏三昧・

	（T.617）『思惟略要法』	（T.619）『五門禅経』	（T.613）『禅秘要法経』
共通するもの	四無量観法、 不浄観法、 白骨観法、 観仏三昧観法、 生身観法、 法身観法、 十方諸仏観法	同左	不浄観法、 白骨観法、 観仏三昧観法、
特有のもの	観無量寿仏法、 諸法実相観法、 法華三昧観法	念仏三昧、 観仏、 不浄門、 四大観、 慈心観、 三災	易想観、 和暖法、 灌頂法、 四大清浄観、 四大相応法
『治禅病秘要法』（T.620）との異同		上に列ねたもののうちで『治禅病秘要法』は不浄観、四大観、慈心観を有する	『治禅病秘要法』も不浄観、慈観、懺悔を有する

不浄門・四大観・観仏・慈心観・三災である。それ以外に、『五門禅経』と『禅秘要法経』とに見られるのが、不浄観・四大観・慈心観である。

五門の中の重要な三つは、不浄観、四大観、慈心観であると言えよう。この三つは、『五門禅経』と『禅秘要法経』に全て含まれている。不浄観（パーリ語：asubhasaññā、サンスクリット語：a-śubhā-smrti）は、四念処の第一で、身体を不浄と観ずるものであり、また、五停心観の一つでもある。身体の膿や腐爛した死体のような不浄なものに意識を集中して観察する修行で、「修習悪露」ともいい、貪心を対治するために身体の不浄を観ずるのである。自分の身体の不浄を観ずることと、他者の身体の不浄を観ずることの両者を含んでいる[19]。不浄観は禅定修行の基礎であり、外の禅経においてもしばしば説明されている。例えば、『禅法要解』巻上（T.616；286b17-c06）には、もしも婬欲が多い場合には、次の二種類の不浄観を行えという。すなわち、（1）死体が臭く爛れている不浄を見て、この不浄の相によって、静かなところで自分が不浄であると観ずる、（2）死体を

見なくとも、師の教えによって想像して、自分の身体の中には、髪・毛・涕・涙・汗・垢・痰・癤などの三十六の不浄なものが充満していると観ずる、という二種である[20]。四大観は不浄観から派生したもので、慈心観（サンスクリット語：maitrī-smrti）も五停心観の一つであり、「慈心観」、あるいは「慈愍観」とも言う。

不浄観・四大観・慈心観という三つの観法が二つの禅経のいずれにも含まれている理由は、それらは声聞乗の基礎となっていると同時に、菩薩乗の思想も備えているという点で特に重要だからである。つまり、不浄観・四大観の二つは、上座部仏教の禅観の基礎であり、慈心観は菩薩戒の非常に重要な基礎なのである[21]。これによって、これら二部の禅経が大乗と小乗の修禅方法を兼ね備えていることが分かるであろう。『禅秘要法経』の巻上では、主に四大観と不浄観を説明し、巻中では、第十九番目の教えの後で始めて明確な大乗思想を説き始める。例えば、「不浄観灌頂法門」では、師長父母を供養すべきことを説き（T.613；264a9-12）、「和暖法」では、普く衆生を救うべきことを説く（T.613；259b16-17）、巻下になって「慈心」を勤修することの重要性を繰り返し強調し、世尊が以前に太子だったときに作った偈文、「願我成佛時。普度諸天人。身心無罣礙。普慈愛一切。亦度於汝等。令諸衆生類。皆住大涅槃。永受於快樂」（T.613；264a9-12）を挙げて、慈心の必要性を説いている。更に『治禅病秘要法』では、阿羅漢の修行階梯を説いたすぐ後に菩薩戒と十波羅蜜の重要性を補っている。

『治禅病秘要法』は、十二の観想法を列ねて禅定修行中の身心の病の対治法としている。それぞれ文章は独立して調っており、どれも「爾時舎利弗、尊者阿難等、聞佛所説、歡喜奉行」の句で終わっており、内容的にも全て繋がっている。『禅秘要法経』には形式が揃わないところがあり、思想的にも明らかな断層が認められる。例えば、巻中の第19-22項の観法を説く段は、独立した段落のように見え、「一時仏在某所」という形で始まり、「時諸比丘等、聞佛所説、歡喜奉行」で終わっているが、元来の文章に後で挿入された文章なのか、これは、この経典の他の段落とは一致しない。

そして、あたかもこれらの段落では大乗的な思想が濃厚に見られ「普済衆生」という言葉に言及されるのである。『禅秘要法経』の巻中では、先に言及した第19-22の観法を除くと、その外の第16-18項、第23-25項は、皆な四大観について説くもので、文章の形式と内容の点で明確な相違を認めることができる。

『禅秘要法経』・『治禅病秘要法』における禅病の種類は、貪欲・耽着を主とし、これを対治するのが不浄観である。戒律に違反したときの対治法はすでに述べてきたものがその基本だが、慈観と懺悔について再び取り上げたい。以下に両経典別に論拠を掲げ、三つの節に分けて議論の題材としていく。本章では、戒律の観想に焦点を当てて討論を行い、先ず、戒律に反したときの観想法を説明し、その後、経典の中で言及される菩薩戒について論じる。その理由は、大乗的な思想がどのようにしていわゆる「禅経」に流入したのかを明らかにしたいからである。

（1）『禅秘要法経』の懺悔観想

まず『禅秘要法経』から見てゆこう。中巻では、懺悔が悔過・滅罪に必要な方法が仏の姿に思念を集中することであると述べている。

> 佛告禪難提及勅阿難、「佛滅度後、若比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・欲懺悔者・欲滅罪者、佛雖不在、繫念諦觀形像者、諸悪罪業速得清淨。觀此像已、復當更觀從像臍中便放一光。其光金色、分爲五支。（T.613：256 a21-25）
>
> 業障重者、見佛動口、不聞說法、猶如聾人無所聞知。爾時復當更行懺悔。既懺悔已、五體投地、對佛啼泣、經歷多時修諸功德、然後方聞佛所說法。（T.613：256 b20-23）

上に引いた箇所は隣接し、いずれも罪過と業障の消滅を説く。滅罪の第一歩が懺悔である。もし懺悔しなければ、たとえ仏から直接説法を聴いた

としても聾者が聴くようなもので、その効き目はない。徹底して懺悔し、五体投地して、はじめて仏法の智慧の言葉を再び授かることができるのである。懺悔後の第二歩が仏の姿をに思念を集中すること、つまり仏の像を観想するに当って、発せられる光の部位と色とを仔細に想うのである。省略した後段の文章はその観想の内容であり、細かく説明されている。その後、次のように説く。

> 佛告禪難提、此名觀像三昧、亦名念佛定、復名除罪業、次名救破戒。令毀禁戒者不失禪定」。佛告阿難、「汝好受持此觀佛三昧灌頂之法、爲未來世一切衆生當廣分別」。（T.613：256 c7-11）

仏の観想の内容は、極めて詳細であるが、仏陀はこの教えを観像三昧・念仏定・除罪業・救破戒と名づけている。この種の観仏の効用は、破戒者をも救済することにあり、破戒によってもなお禅定の効力は失われないとするものである。破戒することの結果は深刻なものであるから、たとえ小戒であっても軽率にすべきでないことは、以下のように述べられる。

> 若不精進懈怠懶惰、犯於輕戒乃至突吉羅罪、見光即黑猶如牆壁、或見此光猶如灰炭、復見此光似敗故衲。由意縱逸輕小罪故、障蔽賢聖無漏光明。（T.613：257 a25-29）

そして、次の文が、本章の末尾におかれて、この章の総括を行っている。

> 佛告阿難、「此不淨觀灌頂法門、諸賢聖種敕諸比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若有欲修諸賢聖法、諦觀諸法苦空無常無我因緣、如學數息使心不亂、當勤持戒一心攝持、於小罪中應生慇重慚愧懺悔、乃至小罪慎勿覆藏。若覆藏罪、見諸光明如朽敗木。見此事時即知犯戒、復更慚愧懺悔自責、掃兜婆塗地・作諸苦役、復當供養恭敬師長父母、於師父母視如佛想極生恭敬、復

從師父母求弘誓願而作是言、「我今供養師長父母。以此功德、願我世世恒得解脱」。如是慚愧修功德已、如前數息、還見此光明顯可愛、如前無異。

復當更繫念、諦觀腰中大節、念心安定無分散意。設有亂心、復當自責慚愧懺悔。既懺悔已、復見臍光七色具足猶如七寶、當令此光合為一光鮮白可愛。見此事已、如前還教繫念思惟、觀白骨人白如珂雪。既見白骨人已、復當更教繫念住意在骨人頂、見骨人頂自然放光、其光大盛似如火色、長短麁細正共稍等、從其頂上顛倒下垂、入頂骨中從頂骨出、入頸骨中從頸骨出、入胸骨中從胸骨出、還入臍中從臍中出、即入脊骨大節中、入大節中已光明即滅。

光明滅已、應時即有一自然大光明雲、衆寶莊嚴・寶華清淨・色中上者、中有一佛、名釋迦牟尼、光相具足、三十二相八十種隨形好。一一相好放千光明、此光大盛、如億千萬日明赫炎炎。彼佛亦說四真諦法、光相炳然住行者前、以手摩頭。化佛復教言、『汝前身時、貪欲瞋恚愚癡因緣、隨逐諸惡、無明覆故令汝世世受生死身。汝今應當觀汝身內諸萎悴事・身外諸火一切變滅』。（T.613：257 a29-c2）

この文の大意は、これによって知ることができる。すなわち、「不浄観潅頂法門」とは修行者の懺悔による滅罪を助けるものだが、もし罪過を秘匿隠蔽すれば、見えるはずの光明はたちまち朽ち木同然で、救われる希望はなくなってしまう。それと同時に、小罪をそのままにして対処しなければ、その小罪のために暗闇が光明の中に入り込んで光明の智慧に欠損が生じるかもしれないのである。もし戒を犯した後でも、誠心誠意慚愧して自らを責め、諸々の苦役に就いて過ちを悔いるならば、この修行によって師長と父母とに供養恭敬できるようになる。懺悔した後には、数息観を行い、そこで白骨の光明を観想し、観仏へとつながる。釈迦牟尼が光明を放ったのち、その手で修行者の頭頂をなで、自身の不浄を観じさせてくれるのである。仏が出現し行者の頭をなでることは、罪の消滅を示すものであり、また、瑞相の出現であり、観相が成就したことの証でもある。ここでの実践の順序は、犯戒―懺悔―観白骨―観仏となっている。

（２）『治禅病秘要法』の懺悔観想

次に、『治禅病秘要法』上巻第五章「治反戒法」を見ていく。

> 犯戒悪人見佛・羅漢・清淨比丘功德福田、隨逐罵辱、誹謗毀之。自飲毒藥、遍體血現、節節火然。狂愚無智、結使猛風動煩惱山――貪婬爲眼・瞋爲手足・愚癡身體――踐蹈世間、植種悪子、既自種已、復教他人求覓。（T.620：336 c24-a1）

破戒の人は自分の身体が保ちがたいのも知らず、まさに毒薬を飲んでいるようなもので、事情が深刻な場合にはいまにも「全身の血が噴き出し、身体の節々が火炎のよう」（「遍體血現、節節火然」）になるとあるが、こうした箇所は、体外に表れる現象として形容しながらもその実は心理状態を譬えて言うのである。傲慢な破戒者は、貪・瞋・痴の三毒による因縁によって、仏・羅漢・清浄比丘の功德を毀謗するばかりか、他人にも仏を謗るよう扇動する。戒を犯した者の最期に果報が現前する時、「その因縁によって発狂し、あるいは叫び歌い、あるいは踊り狂い、地に倒れて穢れ、種々の悪を起こす。罹病したのであるからこれを治療しなければならない」（「因是發狂、或歌或舞、臥地糞穢、作種種悪、當疾治之」）。このとき現われた状態は瘋癲のようなもので、そこでただちに「治病」が求められるのである。

対治の法とは、まず懺悔を為すことである。悔過した後はじめて修行を続けられるのであり、もし誠心に自らがおこした悪と不善なる業を懺悔しえたならば、次の念仏が認められるのである。ここでの念仏観は、釈迦摩尼仏を念じ、次第に七仏へと至らせ、諸菩薩・大乗心へと移ってゆく。もしこのように誠心誠意に念仏したならば、空の観法によって自らを深く恥じ、真の慚愧心を起こして、「一人ひとりの仏が澡罐の水でその頭に注ぐ」（「想一一佛捉澡罐水以灌其頂」）観想をなし、仏の力で灌頂により自身を浄化するというものである。ここのステップでは懺悔と念仏観が同時に進行され、業障を清浄するための第一歩となっている。その後、

復自想身墮阿鼻地獄、十八地獄受諸苦惱、於地獄中稱南無佛・南無法・南無比丘僧、修行六念、諸佛・如來於其夢中放白毫光救地獄苦。見此事已、如負債人心懷慚愧應當償之、一心一意脱僧伽梨・著安多會・詣清淨僧所、五體投地如大山崩、心懷慚愧懺悔諸罪、爲僧執事作諸苦役――掃廁、擔糞――經八百日。（T.620：337 a21-28）

とあり、今度は自身が無間地獄に堕ちるのを観想する。しかし地獄中にあって仏の名号を称え、仏・法・僧の三宝に帰依することで、ただちに仏が夢の中にやって来て白毫から光を放つ相が示される。この瑞相が有ったならば、行者は自然に深い慚愧の心を起こし、諸々の罪を懺悔して、僧となって各種の苦役をなすべく、八百日を過ごす。

この後で、身体を洗い清めることができ、清浄心と清浄身とが最初に完成したことが示されるのである。ここからは、仏の白毫の相光を一日から七日に至るまで観想できる。そのあと智者のもとへ向かい、懺悔を求めるが、智者はまた行者に対してこう言う。

比丘當知。金瓶者、是地氣也。青色蛇者、從風大生、是風大毒。綠色蛇者、從水大生、是水大毒。白色蛇者、從地大生、是地大毒。黃色蛇者、從火大生、是火大毒。六頭龍者、是汝身中五陰及空。如此身者、毒害不淨、云何縱惡・犯戒不治。（T.620：337 b2-12）

四大と五蘊による毒とを観ぜよというのであり、一面では四大の不浄を観じつつも、もう一面ではそれを借りた懺悔なのである。この後、先の『禅秘要法経』と同様、仏陀が再び行者に掃塔・塗地を含む八百日間の諸苦役をなすべきことを説く。身体の行法によって決心を示させ、業障を消し去らせるのである。さらにまた、仏が金色の光を発して行者の頭を摩するのを観想させる。ここに到って、行者はついに再び清浄の身となり、僧の一員として入り戒律の教えを聴取することが許されるのである。そして、仏

陀は自らが説く教えを「懺悔法・不淨觀門・無我人鏡」(T.620：337 b18)の法と称している。

これまで述べてきたところ、戒律に違反したときの対治の方法とは、不浄観・念仏観・懺悔であった。このうち懺悔は非常に重要なステップであり、何度もこれを繰り返さなければならず、瑞相が見られるに至ってようやく終わるのである。先の『禅秘要法経』の白骨観と同じく、瑞相があって、それが証になるのである。ここの実践の順序は、犯戒―観地獄及觀佛現於地獄―懺悔―観四大不浄である。

(3)『治禅病秘要法』中の大乗的傾向の強い部分

『治禅病秘要法』巻上は先に戒を犯した際の対治法を説き、その後に再び持戒の重要性を提示する。それが巻下の特に長い一章、「治入地三昧見不祥事驚怖失心法」である。題に「驚怖」とあるも、内容はただ対治に関わる驚怖の有り様だけではない。仏陀がまず三昧に入った修行者に起こり得る身の毛もよだつ恐怖の状態を解き明かすとともに、この種の禅病に対する解決法を教える。この節の禅病対治法は、前に述べた各種の対治法と明らかに異なるものである。

ところで、この節での説明は前のものとは明確に異なっている。前文ではいずれも不浄観をもって対治とし、その観想の内容は主として虫蛇や膿といった不浄のものであり、修行者に厭離の巻上を懐かせ、欲望の囚われを除こうとするものだったが、ここでの観想は、宝華・宝樹・宝珠などといった諸々の悦ばしいものである。例えば次のようなものである。

> 治之法者、先想一日與日天子乘四寶宮殿作百千伎樂、在黑山上照曜黑山令漸漸明。想一日成已、復想二日。想二日已、復當自觀己身白骨三百三十六節白如雪山、日照雪山。復想頂上有月天子四寶宮殿、百千眷屬捉於月珠置其頭上。此想成已、想第三山上復有一日、如上無異。見此日已、復想頂骨白雪山上如上、復有一月。既見月已、復想第四山上復有一日照此

黒山。既見日已、當想己身三百三十六節白骨之山皆角相向、一一角間有一月光。天子手捉兩珠兩向持、如是諸節角角之間皆應停心、十出入息頃諦觀令了了、見一一骨有二十八宿、明淨可愛如七寶珠。（T.620：339 b14-28）

ここは、伎楽があり、また宮殿・月珠などのある、全てが美しく楽しい世界である。しかし白骨のすがたを観ずるとともに、それぞれはただ光を放つだけの光景へとたちまちに変わり、最後にはまた白骨の中に「明浄にして愛すべき七宝珠のような」（明淨可愛如七寶珠）二十八宿を見いだす。白骨観はもともと典型的な不浄観であったが、ここでは、白骨が清らかで愛すべきものに変わってしまっており、徐々に伝統的な禅定修行の方法を脱しようとしていることが分かる。その後、更に一歩を進めて観想を行うことで、浄化という修行の足取りを進めることができる。

此想成已、復想一金翅鳥王頭戴摩尼珠、搏撮四蛇及與六龍、蛇驚龍走。諸山鬼神一時驚動、狀如黒色――皆是前身破戒果報――當勤懺悔嚴淨尸羅。尸羅淨故、日月光明倍更明顯。若心念惡・口說惡言・犯突吉羅、摩尼珠上則雨黒土・日月坌塵・星宿不行。阿修羅王九百九十九手千頭一時出現、映蔽日・月・星宿不現、此名爲退、爲惡心刀・惡口火、破戒賊之所劫奪。（T.620：339 b28-c7）

仏陀は言う、修行者は必ず恐怖の想を為す原因が自らの過去における破戒行為からきていることを知り、懺悔した後に清浄の戒行を行えと。「尸羅」とは「戒」、「突吉羅」とは「小罪」のことであり、両者とも戒律に違反した行為のことで、修行の妨げになりうる。そこで、上に述べた宝珠の観想を行った後に過去に犯した戒律に誠実に向き合い、懺悔によって罪を滅することで自分の戒体を清らかにせよというのである。

若欲服此勝甘露藥、先當持戒淨諸威儀、懺悔業障・惡不善罪。復當繫心

繫意端坐一處、數息閉氣、如前觀於三百三十六節、使一一節角角相向。星月之屬亦如上說。心復明利、見一一節間月光如衣、星光如縷、縫持相著。（T.620：339 c7-12）

この段の経文の意は、懺悔が甘露という薬となるための要件は、過去の破戒によりつくられた障礙があることであり、懺悔を経ずしては戒を受持しえないというのである。もし誠心に懺悔したならば、それに続く次の観想が可能となる。すなわち「愛しむべき物」（形状可愛）に勝る須弥山世界の金剛山、および「白く輝き、鮮やかにして妙なる」（皎然大白、色潔鮮妙）七仏の白毫の観想である。この段では、滅罪に対する懺悔の重要性が、習禅に対する戒律の重要性と等しいということを再度強調しているが、根本的な問題は罪業の浄化を進展させることにあるのである。

こららの観想が終わった後、清らかな戒体が得られ、引き続き仏陀は五蘊・苦・空・無常・無我の道理を説き明かす。その道理を聴くと、修行者は速やかに四沙門果を悟り、順次に須陀洹、斯陀含、阿那含果の位を得、最後には過去の声聞行者は、釈迦摩尼仏が金剛喩定の境地の意味を説くのを聞いた後に金剛三昧に入り、その後、金剛三昧から出て、大阿羅漢となったのである。上に述べた修行の順序は、白骨を觀じて後に宝珠に至り、その後、恐怖心のために罪の懺悔を行い、懺悔の後、白骨が再び星宿と連なるように輝くのであるが、このような「心が明らかで澄んでいる」ことを示す状態になって、仏陀が説こうとする五蘊・苦・空・無常・無我という真理を受け入れる準備が整えられるのである。

とりわけ注目すべきは、たとえ前述の大阿羅漢の境界を悟っても、それは未だ窮極に至ったものではないということであって、経典中では、続く次のステップとして「発無上菩提心」を説いている。

若發無上菩提心者、初見七佛白毫光照、一一如來白毫光明分爲十支、化十寶花・寶樹・寶臺行列在空。時十方佛亦放光・水、如上所說洗諸節間、

一一佛白毫光中說十八種慈心法門・說十八種大悲法門・說十八種大喜法門・說十八種大捨法門。漸漸增長教已、修習四無量心。具四無量已、爲說十種明心。具明心已、教說色即是空・非色滅空。既觀空已、教菩薩六法。行六法已、修行六念、念佛法身。念佛法身已、起迴向心。迴向成已、立四弘誓不捨衆生。四願成已、具菩薩戒。菩薩戒成已、學修相似檀波羅蜜。檀波羅蜜成已、學修相似十波羅蜜。（T.620：339 a21-b4）

上文にあるように、無上菩提心を起こそうとするものは、七仏が光を放つと十方仏も同時に光を放つところ観想しなければならない。四無量心・十種明心を修めてから、空観を行った後、再び菩提心を起こすための菩薩六法を行い、四弘誓願を立て、衆生を度すことを誓う。ここから、菩薩となるのであって、初めて菩薩戒を受けて、布施波羅蜜などの十波羅蜜を実行しながら精進するのである。しかし阿羅漢をすでに越えたとしても、この位の菩薩はそのの境地に達したに過ぎない。ここでの叙述方法は、菩薩を阿羅漢の後に置くもので、しかも四弘誓願と菩薩戒および檀波羅蜜を強調しており、大乗思想的色彩が濃厚に認められるのである。

四、結語

本論では、『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』中の、特に戒律に違反した禅病、そしてその対治における観想に焦点をしぼって論じ、両経典それぞれの戒律に背いた際の観想方法から説明し、最後に『治禅病秘要法』中に見える菩薩戒を取り上げた。そこには、大乗思想的色彩が「禅経」系統のなかに溶け込んで行く軌跡の一端を看て取ることができる。禅定修行と観想との関連について、山部能宜教授は既に『禅秘要法経』・『禅病秘要法』・『五門禅経要用法』・『観仏三昧海経』（T.643）の詳細な比較を行い密教と禅定修行の緊密な関係を明らかにした。初期における禅定修行（隆盛の）背景については、本拙稿の視野は限られており、観仏懺悔と禅病の間の関

係、つまり、禅定修行者がどのように観想し、また、懺悔を実践し、更に習禅に励んだかについてのみ論じた。他の一面から言えば、禅定修行と菩薩戒受持と懺悔の間の緊密な関係を再確認し、それと同時に『梵網経』が中国の初期禅宗においてどうして重要な経典になったのかを明らかにしようとした。

『禅秘要法経』では、その最も重要な観法を不浄観・四大観・慈心観としていた。この経典の文章はかなり長く、上・中・下の三巻に分かれ、第三巻では特に慈心観について説明されている。経典の全体の禅病に対する分類は複雑で、計三十種以上の観法があり、その多くは心病の対治である。戒律に背いた際の禅病に関して、経典中ではその観想の方法を「観像三昧」および「不浄観潅頂法門」と称している。その順序は、犯戒―懺悔―観白骨―観仏である。本拙稿に引かれる経典によって知られるように、仏が出現して修行者の頭を撫でることが瑞相であり、観想の成就を示すものである。観想される仏の姿は、細大にわたって遺漏なく、観想・懺悔によって悟りうる果位は、四沙門果をその最高とする。

『治禅病秘要法』上・下二巻は、心病・身病のいずれについても論じ、また不浄観・四大観・仏観・慈心観を主要な方法とするものであった。ここで分類される禅病の種類は、乱倒心・四大内風・火大・地大・水大・風大・噎・貪淫・利養瘡・犯戒・楽音楽・好歌唄偈讃・鬼魅所著などであった。経典中ではこれらに対応する治療法が述べられている。本拙稿で引いた犯戒の対治方法は『禅秘要法経』の白骨観と同じく、瑞相が現われることを証とし、その順序は、犯戒―観地獄及観仏現於地獄―観四大不浄という順である。

『禅秘要法経』と『治禅病秘要法』の両者を比較すると、どちらも不浄観・四大観をかなり重視して、声聞乗における禅観の基礎となっている。そしてまた仏を観じる点はどちらも同じである。基本的には、『禅秘要法経』・『治禅病秘要法』中の禅病の種類は、貪欲をその根本とするものが多く、貪欲を対治する主たる方法が不浄観である。そして戒律に背いた場合の対治の

方法は、不浄観を基礎としてさらに慈観および懺悔を加えるものであった。ただ一点異なるのは、『禅秘要法経』に含まれるのは声聞乗の思想だけで、菩薩乗の修行方法が明確に解き明かされていないのに対して、『治禅病秘要法』は、阿羅漢を目指す修行の後に、菩薩戒と十波羅蜜を用意するという優位性をもっていたという点である。この経典には、声聞乗の基礎だけでなく、同時に菩薩乗の思想をも有していたことが分かるのである。こうした違いは、あるいは両経典成立の順序を考えるにあたって一つの糸口を与えてくれるかもしれない。鳩摩羅什を『禅秘要法経』の訳者とする考証に対しても、間接的ながら反駁する論拠を提供することにもなろう。

【注】

1　本論文の初稿は、2019年５月25-26日に東洋大学で開催された国際シンポジウム「初期禅宗史研究の最前線」（The Forefront of Early Chan Studies）において発表したものであり、筆者は、主催者、ならびに開催責任者の伊吹敦教授に謹んで心からの謝意を表するものである。会議の席上での熱心な討論が論文の改定に大きな助けとなった。特に伊吹敦、何燕生、山部能宜、程正、Bernard Faure、Wendi Adamek等の先学が会議中に提起した意見に感謝の意を表したい。ただ、学力の制約のため、本論文には、まだ十分に究明できずにいる問題が多く残されている。例えば、『涅槃経』の思想と犯戒・禅修行との関連等がそれであるが、十分でないところについては、今後の研究課題としたい。

2　これは亀茲石窟（キジル、焉耆）出土の逸名写本であり、その内容が説一切有部の禅修行の指導書であるために、これを『梵文瑜伽書』と呼ぶ学者もいる。現在、学界では、ドイツのライプチヒ大学のシリンロフ（Dieter Schilingloff）教授が編輯したものを用いている。Dieter Schlingloff, *Ein Buddhistisches Yogalehrbuch,* (LUDWIG AUER GmbH Donauworth, 2006) を参照。また、次の論文も参照されたい。Nobuyoshi Yamabe, “The Significance of the ‘Yogalehrbuch’ for the Investigation into the Origin of Chinese Meditation Texts”, *Bukkyō bunka* 仏教文化 9 (1990): 1-74.

3　Nobuyoshi Yamabe,“The Sutra on the Ocean-Like Samadhi of the Visualization of the Buddha: The Interfusion of the Chinese and Indian

Cultures in Central Asia as Reflected in a Fifth Century Apocryphal Sutra." (PhD dissertation, Yale University, 1999), pp. 59-114.

4 以下の論文を参照。Nobuyoshi Yamabe, 2010. "Visionary Consecration: A Meditative Reenactment of the Buddha's Birth." In Ch. Cueppers. M. Deeg, and H. Durt eds. *The Birth of the Buddha: Proceedings of the Seminar Held in Lumbini, Nepal, October 2004*, pp. 239-276 ; 山部能宜, 2014.「禅観経典にみられる灌頂のイメージについて」(『アジアの灌頂儀礼：その成立と伝播』京都、法藏館）166-186頁。なお、次に掲げる論文では、生死輪に対する議論の中で密教が影響を与えた可能性に言及している。山部能宜、趙莉、謝倩倩,「庫木吐喇第75窟数碼復原及相関壁画題材及題記研究」(李肖主編『糸綢之路研究』第１輯、北京、三聯出版社、2017年）232-233頁。

5 山部能宜, 2000.「『梵網経』における好相行の研究―特に禅観経典との関連性に着目して」(『北朝隋唐中国仏教思想史』205-269頁を参照。また、初期禅宗と菩薩戒の関連については、次に掲げるように伊吹敦に多くの論文がある。「大乗五方便の諸本について―文献の変遷に見る北宗思想の展開」(『南都佛教』65、1991年６月）71-102頁、「最澄が伝えた初期禅宗文献について」(『禅文化研究所紀要』23, 1997年６月）127-201頁、「初期禅宗文献に見る禅観の実践」(『禅文化研究所紀要』24、1998年12月）19-45頁。また、次の拙稿も参照されたい。Pei-ying Lin, "A Comparative Approach to Śubhākarasiṃha's (637-735) Essentials of Meditation: Meditation and Precepts in Eighth Century China", in *Chinese and Tibetan Esoteric Buddhism*, edited by Yael Bentor and Meir Shahar, 156-94; 2017, "The Doctrinal Evolution of Formless Precepts in the Early Chan Tradition: The Theory of Mind Purification in the Laṅkāvatāra Sūtra and the Brahmā's Net Sūtra", in *Rules of Engagement: Medieval Traditions of Buddhist Monastic Regulation*, edited by Jinhua Chen, Susan Andrews, and Cuilan Liu, chapter 7.

6 Nobuyoshi Yamabe,"TheExaminationof the Mural Paintings of Toyok Cave 20 in Conjunction with the Origin of the Amitayus Visualization Sutra." *Orientations*, Volume 30 - Number 4 (1999.04): pp. 39-45.

7 森美智代「クムトラ石窟第七十五靴の壁画主題について：ウイグル期亀茲仏教の一側面」(『美術史研究』50、2012年）125-146頁。この石窟についてのその後の議論については、前掲の山部能宜、趙莉、謝倩倩,「庫木吐喇第

75窟数碼復原及相関壁画題材及題記研究」を参照。

8　王芳「試論亀茲石窟第二種画風洞窟券頂壁画的禅観意涵―従克孜爾 171 窟、110 窟与森木塞姆 48 窟出発」(『中華仏学研究』第18期、2017年）83-112頁。

9　末木文美士「観無量寿経―観仏と往生」(『浄土仏教の思想　第 2 巻：観無量寿経・般舟三昧経』東京、講談社、1992年)。

10　Greene Eric Matthew, “Meditation, Repentance, and Visionary Experience in Early Medieval Chinese Buddhism.”（Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley, 2012）pp. 126.

11　Greene,2012, p. 126.

12　宇井伯寿監修『仏教辞典』(東成出版社、1953年、大東出版社、1986年、第三刷発行)。

13　浅野斧山『禅病論』(一喝社、1911年)。

14　大隅和雄編『中世の仏教と社会』(東京、吉川弘文館、2000年）164-183頁。この論文の大部分は、日本の中世の禅僧、例えば白隠等の禅僧の実例について論じたものである。

15　渡邊幸江「禅病：『首楞厳経』に見る五蘊」(『駒澤大学仏教学部論集』43、2012年10月、池田魯参教授退任記念号）366-350（171-187）頁。

16　Christoph Anderl, 2018, “Metaphors of ‘Sickness and Remedy’ Among the early Chán materials from Dūnhuáng,” in *Reading Slowly: A Festschrift for Jens E. Braarvig,* edited by Lutz Edzard, Jens W. Borgland, and Ute Hüsken, pp.27-46.

17　『禅苑清規』巻八、『禅宗全書』(台北、文殊、1990年）81冊、158頁。また、X.63,no.1245:545a11-12を参照。

18　山部能宜「『思惟略要法』と『五門禅経要用法』」(『印度学仏教学研究』第49巻第 2 号、2001年 3 月）866-872頁。

19　自分の身体の不浄を觀ずる際には、次の九つの相を観ずる。すなわち、一死想、二脹想、三青瘀想、四膿爛想、五壊想、六血塗想、七虫噉想、八骨鎖想、九分散想である。他には『智度論』巻十九、『倶舎論』巻二十二、『大乗義章』巻十二等に見える。『丁福保仏学大辞典』の「不浄観」の条を参照されたい。

20　他に『大毘婆沙論』巻四十、『倶舎論』巻二十二、『大乗義章』巻十二・巻十三にも不浄観が説かれている。『中華仏教百科全書』の「不浄観」の条を参照されたい。

21　三聚浄戒、すなわち、摂善法戒・摂律儀戒・饒益有情戒に対応するであろう。

※以下、中国語の原論文には、「参考書目」「附録」が列挙されているが省略する。それらについては、別に掲載した中国語の原論文を参照されたい。